研究所だより

価値総研 10 周年を経て

1999 年に㈱長銀総研コンサルティングから㈱価値総合研究所に改称して、再スタートしました。その後、早いものであっと言う間に 10 年を経て、現在に至っていますが、この間、いろいろな事があり、多くの人材が出入りするなど日々是変化の 10 年でした。

2 年後の MEBO は思わぬ事態でしたが、結果的には役職員が株主になった組織形態は文字通り自律的なシンクタンク・コンサルタント会社としての形態として適切なものでした。この自律性（自立性）は我々の活動の大きな拠りどころでもありました。

時代の変化により行政や企業の課題も変化しましたが、それらに対して先駆的に柔軟な姿勢で取り組んできました。

10 年という歳月の感じ方は様々ですが、人生でも組織でもひとつの区切りの単位と考えられます。10 年を経て、個々の研究員がこれまでの 10 年を振り返りながら、その評価とともに次の 10 年の「かたち」を考える時期を迎えています。

政権交代の是非はともかく、時代は変革を必要としています。何度も変革が問われながら国も会社もそして個人もなかなか変革ができないままに過ぎてきました。高齢社会や社会経済の国際化・情報化などの長年の課題はすでにその渦中にあり、新たなシステムやかたちを構築した者が勝ち残る時代が来ています。これからの 10 年はまさにその「かたち」を構築する時期だと思いますし、これをチャンスだと考えて新たな挑戦に取り組んでいきたいと思っています。

編集者から

㈱価値総合研究所の機関紙として社名の「価値」を対外的に表明する「Best Value」は最高の価値創造を目指して発刊してきました。

㈱価値総合研究所として改称して以来すぐに機関紙の発刊の検討を開始して 2000 年に準備創刊号を発刊し、その後創刊号から 24 号（本号）に達しました（準備創刊号から加えて 25 号となります）。

機関紙は会社の顔であり、重要な発信媒体として名称から構成まで、議論を尽しましたが、今となっては当時を懐かしく思い出します。

当初は、会社も改称したばかりであり組織紹介も含めて組織としてアピールする意図から機関紙の執筆も重要な業務と位置づけて、各号ごとに全体のテーマを設定し、それに応じて研究員に執筆を要請し、発刊時期も時間厳守とするなど、かなり厳格に運営してきました。

発刊が軌道に乗った時期からは各号毎に編集者を決め、担当者がそれぞれ自由に執筆する方針としました。そのため、発刊時期はルーズになりましたが、各号はより個性的になったと思います。

日常の業務が忙しい中で、機関紙を執筆することはかなり負担ではありますが、各研究員は会社そして自らの発現の機会として前向きに取り組んでもらってきました。その結果、改めて、これまでの内容を見直すと会社全体の姿が垣間見えますし、個々の取り組み姿勢や成果が良く表れています。

外部の方々からも好評を得ており、皆で汗をかいたかいがあったというものです。とにかく、継続は力なりを文字通り実行してきた結果です。これからも、時代の変革に先んじて、㈱価値総合研究所の価値を表現する場として皆で継続していきたいと思っています。

これまで以上に、読者の皆様のご意見そしてお力沿えをいただけると幸いです。

（村林　正次）